孤独を感じることのない社会

山梨学院中学校二年　　水越　葡乃

「どうしたんだろう。」
ある日、私が母と買い物に行った時に起こった出来事です。私と母が二人で歩いていると、店の案内図を見ながら何か困っているような様子の女性がいました。行き交う人たちは女性が困っていることに気がついている様子でしたが、誰も声をかけようとせずに通り過ぎていました。どうして声をかけないんだろう、と通り過ぎる人に腹立たしさを覚えたものの、私自身もドキドキしてしまい、声をかけることができませんでした。その女性は補聴器をしていました。母はその女性に手話で「どうしましたか」と尋ねました。するとその女性は「店の場所が分からない」と手話で言いました。女性は母としばらく話をした後、店の場所を案内図から見つけ、笑顔で去って行きました。私はこの女性が困っていることに気づいていたにもかかわらず、助けることができず情けなく感じました。私が声をかけなくてもきっと大丈夫、誰かが声をかけるだろう、と心のどこかで思っていました。もしかしたら、補聴器をしていたからドキドキして声をかけられなかったのかもしれない、とモヤモヤした気持ちにもなりました。

少し前、祖父母宅を訪ねると祖父が補聴器を購入したことを知りました。数年前から祖父は耳が遠くなり、聞こえにくくなっていたと祖母が教えてくれました。思い返すと、祖父は度々、後ろから話しかけても気づかなかったり、遠くから呼んでも返事がなかったりしました。私はそんなことがあるといつも悲しい気持ちになっていました。

そこで、私は耳が聞こえにくいということを体験してみることにしました。祖父やあの女性の気持ちを知りたかったからです。耳栓をして聞こえにくい状況を作り、生活してみました。聞こえにくい状況で生活することは私が思っていた以上に大変なことでした。母と話をするとき、いつもであればテレビを観ながらや、本を読みながら話したり、キッチンや隣の部屋にいる母とも普通に会話をしたりしています。しかし、聞こえにくい状況では、何かをしながらの会話では話の内容がしっかりと理解できず、じっと母の顔を見て、話をしなければなりませんでした。母が掃除を始めると、掃除機の音で何を言っているのか鮮明に分からず、何回も聞き返しながら会話をしました。中でも特に大変だ

と感じたのが、家族での会話でした。いつもであればリラックスして会話ができるのに、話している父や母に注目して、一生懸命話を聞かなければ話の内容についていけませんでした。何か聞き取れないことがあっても、話が盛り上がっていると中断してまでいちいち聞き返すことができず、どんどん会話の内容が分からなくなり、話についていけなくなりました。三人で話しているのに、自分だけが話の輪に入っていないようで、孤独感や疎外感を強く感じました。私は祖父とあの女性のことを考えました。祖父の耳が聞こえにくくなったのは少し前のことです。祖父は話をしているときいつもこんな思いをしていたのかもしれない、と胸がいっぱいになりました。聞こえにくいことに対して工夫をしようと思えなかったことがとても悔しかったです。そして、あの女性に声をかけられなかったことへの後悔が膨らみました。

聞こえにくいことは不便なことだと思います。私がたった一時間聞こえにくい体験をしただけでもとても不便を感じました。しかし、不幸であってはいけないと思うのです。聞こえにくいことで、孤独感や疎外感を感じること、嫌な思いをしながら生活をしていくことはあまりにも不条理だと思います。そうならないために、私たちができることはなんだろうと考えてみました。それは理解する心なのではないかと思います。耳が聞こえにくいということはどういうことなのかを知り、理解することで、聞こえにくい人が生活しやすくなるように私たちも工夫できるのではないかと思うのです。

もしあの日に戻ることができたなら、私はあの女性に声をかけ、困っていることを聞き一緒に解決したいです。顔をしっかりと見たり、身振り手振りを使ったりすることで、互いに通じることができると思うのです。孤独を感じることのない社会、互いを理解する心をもてる社会であってほしいと感じます。